

岡本寧浦（おかもとねいほ）

ここ乗光寺は幕末の土佐学界に一種の学風を残した贈正五位岡本寧浦が生まれた処である。岡本寧浦は名を退蔵、諱を維密（これみつ、いみつ）といい、乗光寺第五世弁翁の子として寛政六年（1794）に生れ、幼名を有隣、長じて大年と呼び、号は始め雄峯さらに除闇、後に寧浦と唱えた。

幼少のころ父から習字や読書の指導をうけたが、一度目を通すと決して忘れなかったといわれている。したがって老年の父は非常に彼を愛し、学問に専念さすため、甥の立然（りつぜん、りゅうぜん）を中継ぎ養子に迎え、その後に大年にゆずろうと考え、寛政十一年（1799）二月立然に寺務をつがせた。大年六才の時である。

そこで大年は土居（高知県安芸市）の小牧天山や、安芸の岡它山について詩文を学ぶことになった。しかし、立然には実子泰澄が生まれたので、大年はこれに寺をつがせ、自分はその天分をのばそうと志を立て、自由の天地を求め、本山の西本願寺西六条の僧寮に入り、そこで仏典をみっちり研究して大いに得るところがあった。

その後、安芸国（広島県）へ行き、当時有名な学者頼杏坪兄弟や、筑前の亀井南溟その子昭陽につき儒学（孔子孟子の学問）を学んでいた。その頃安芸国浄土真宗の僧石泉は学徳高く、仏典にも通じていたのでその門に入り儒学と仏典を学ぶことになったが、石泉は彼を一見して、「天下の偉材とは大年の如き人か」と感心したという。そして、師弟互いに心通

じて教える者、教えられる者ただ一生懸命であった。そのかいあって彼は石泉門下では円織えんしきと共に二傑と称されるようになった。

石泉の名声が高くなると“好事こうじま魔多し”のたとえどおり、石泉にけちをつける者があらわれた。本山でも石泉を京都に呼んで、審問するという噂があった。これを聞いた寧浦は大いに憤慨し、自ら師に代わり弁解するために上京を決意すると、師石泉は非常に喜び彼の出発にあたり、詩をはなむけとした。

寧浦は大いに感激し、勇躍京都の西本願寺へ行き、「自分は石泉門下の僧屯である。我が師の説が本山の教義に反するとそしめる者があるので、師石泉に代わって弁明するためにきた。この浄土真宗の根本「教行信証」により何人とも応答しよう。」といって本願寺の虎の間（大応接室）にどっかと座りこんだ。

本山では彼の意気に吞まれたのか、議論の結果を恐れてか、誰も相手に出てくる者はない。その上、寧浦を太鼓堂の番人小屋へつれこみ、翌朝なんの話もなく議論もせず、番人が「もう何も用がないので出ていってもらいたい」と立ち去った。彼は本山の処置に憤慨し、「師石泉に申訳がない」と思いつめ腹を切つて詫びようとしたが、しかしそれは僧としての行動でないばかりか、何の役にも立たないと数日間考え込んでいたが、遂に意を決し、天保六年（1835）五月から翌年六月まで約一ヶ年余りにわたり、大阪天満玉沢町正覚寺で、教行信証全巻の大講演を一般に公開した。それはあたかも1519年マルティン・ルターがライブチヒの討論に苦しめられ、遂に信仰上の事は聖書により判断する他はないと、従来の温和な説を蹴飛ばして宗教改革にのり出したように、大年は宗祖親鸞聖人の説に反るものはことごとくこれをあげて我が師石泉の説と照らし合わせ、公平に評し判断を下した。これを実に彼が

心血を注いだ大講演で、その熱誠と彼の博識に感じて、これを聞く者が非常に多かつたといわれる。

ルターはその討論をきっかけに宗教改革の旗じるしを明らかにするも已むなきを悟ったが、寧浦はこれと反対に、仏法の活社会への実益の少なさを悟り仏教より儒学に転向した。そして名を「退いて密を蔵する」という語をとり、岡本退蔵維密と易め、郷里安田浦にちなみ寧浦と号し、これより儒学者として世に立つことになった。しかし、仏教が父祖の崇敬するところなので、その後は仏教につき一言の悪口も言わなかつた程の祖先崇拜と親孝行者であった。

寧浦は儒学に転じると、大阪の大学者篠崎小竹や大塩後素（大塩平八郎）につき儒学を学んだ。学友に安積良斉・野田笛浦・坂井虎山らがあつた。彼は天保六年（1835）九月郷里に帰り、四十二才の時安芸の医師小野敬蔵の娘とき（三菱創業者岩崎弥太郎実母美和の姉）を妻にむかえ、再び大阪に出て儒学を教授したが、特に易学をもつて聞えた。

寧浦の評判が高くなると、備後（岡山県）の福山侯の耳に入り、藩の儒学者に迎えることになったが、土佐藩主山内豊熙がこれを聞き、「土佐出身の大学者が他藩に採用されるのは我が土佐藩の名おれだ」として福山侯にかけあい、天保九年（1836）七月二十四日、用人格上下三人扶持（年七石六斗九合）教授館下役として採用した。時に彼は四十五才の知恵盛りであった。寧浦は勤めのかたわら高知新町で家塾、紅友社を開いた。紅友は酒の別名で酒好きの彼にふさわしい。塾には講義を受ける者が溢れるほど集まり、この紅友社に入る門人は前後千人を超えたといわれる。

寧浦は、短身で風彩ふうさいがあがらず、いつも粗末な着物をきて袴は継ぎ布が当たったものをつけ、身なりに頓着しなかった。ある時、門下生岩崎弥太郎（東山）をつれ、大阪で学者の会合に出席した。会場には天下の堂々たる大学者が集まっていたが、控室にいた弥太郎は、我が師寧浦の貧弱な風彩を見て肩身の狭い思いをしていたが、段々議論の末、寧浦は堂々と自分の意見を述べたので、弥太郎は流石我が師なりと、辺りに誇ってやりたかったという。

寧浦は道を行くにも常に詩文等を考えていたのか、得意の時は、独り笑いをして、時には通行人に突き当たることもあった。また、家に帰る時には門口から袴をとき始め、家中を歩きながら着物をぬぎ散らし、夫人が後ろからそれらを丁寧ていねいに始末していくので知らぬものは愚か者か狂人かと思ったということである。

しかし一度講座につくや、その態度はうって変わって威儀いぎを正し、諄々じゆんじゆんたる教授ぶりには、門人たちも姿勢を正して熱心に受講する。解らぬところは古今の例を引用し、解釈がどこまでも親切丁寧であった。

寧浦は酒好きで毎日欠かさず飲み、家でたしなむよりも夜毎に友人知己を訪問して盃を交わし、一夜に二、三軒飲み廻ることも珍しくなかった。郷土出身の宮田用蔵とはとくに親しく、ある夜、用蔵の家で深酒し、よい気分家で帰った。が、早朝用蔵の便が来て、刀を差し違えてきたというので、さすがの寧浦も恐縮し、さっそく用蔵の家に行き、あやまって刀をとりかえてきたことが彼の日記に見えている。飲酒のため勝手もといつも不如意で、

たびたび公金借用の願を出したこともあり、弘化元年(1844)七月十二日岩淵の足輕の家を買収約束をしたが、金に困り、衆議講をとり、なお他からも借金してやっと支払いを終え、十二月二日やっとその家に移ることができた。したがって家計を預かる妻ときの苦労は大抵ではなかっただろう。それでも妻には余程思いやりがあったと見え、妻の病気の際は、その容態のことが彼の日記に委しく記されている。

寧浦は酒を飲み過ぎるためか身体に故障があり、たびたび休講しているが、公私の別は明らかにし、職務には忠実で、公金の収支は少しの誤りもなく明細に記帳し、教授館備付の図書そなんつけの虫干などの際は、その書名を丹念に記し、公用の備品や図書の引き継ぎにはひとつの誤りもなかった。彼はただの酒飲みではなかったのである。

酒と交友は寧浦の生命であった。幡多の樋口真吉や、武市瑞山・鹿持雅澄かもちまさずみ・吉田東洋・間崎滄浪そうろうらを始め、その交友は一ヶ月約百人ぐらいであり、時々、洗濯休という名目で藩庁に願う休暇をとって安田に帰った。

帰 国 宜 養 拙。	春 至 意 渝 寛。
不 慣 郷 人 俗。	猶 為 客 子 看。
午 眠 雀 鳴 戸。	夕 醉 柳 当 欄。
生 理 非 吾 務。	硯 日 身 世 安。

安田浦常行寺(山号を少林山、禅宗曹洞派。安芸の浄貞寺の末寺。現在は廢寺。)住職しやく志静しせいは下山(安芸市)の長国寺にある遊雲楼に住んでいたが寧浦は彼を訪ねお互いに盃を交わし且つ談じたほほえましい様子が日記の一節に見えている。

寧浦は相撲が大好きで、相撲見物に十市や須崎、赤岡まで出かけ、主な勝負や相撲場の出来事まで委しく記している。ことに郷土出身の力士群竜（片山村蔵）が出場する時には、いつも欠かさず見物している。

寧浦は江戸に出て天下の大学者と交わり学問の奥義をきわめるのが年来の希望であったので、藩庁の許可をやっと得て、天保十一年（1830）春三月、北山越しに一ヶ月余の旅を続けて江戸に着いた。江戸のにぎやかさは四十七才の寧浦を驚かせたようである。同年四月十日七日江戸藩邸の御錠前口役を勤めることになり、名高い学者や名僧を訪ね学問について語り合うことができた。当時、天下の大学者といえば、佐藤一斉と安積良斉であったが、一斉は天保十一年幕府の儒官となってその名声が高かった。寧浦は見識ある者は傑れた師を選ぶにない佐藤塾に入り、天保十一年九月から同十二年十二月まで学んだ。

天保十三年（1842）五月六日、学問御用係に任命され、土佐藩江戸詰の侍たちに学問を講義するかたわら林大学頭はやしだいがくのなかみや古賀塾の講筵につらなり、また、若山莊吉より易学の講義を受けている。時には刀匠直胤なまたねと親交し、互いに盃を交わしたことが彼の日記に書かれている。

その他天下の志士とも交わり、彼の見識はいよいよ高まった。天保十四年（1843）五月二十三日、藩主が江戸詰から帰国する際、その供をして江戸を出発し、七月二日懐かしい土佐に帰着した。

寧浦塾紅友社の状況は、弘化五年（1843）の手記、自宅導方みちびきかたによると、教授は毎日辰（午前八時）より午（正午）までとし、奇数日は勤人に教え、偶数日は各個人指導に読書問答を

加え、毎月二日は孟子、七日は易を筆記させ、休日は一日、十五日、二十五日とし、これらの定めはよく守られていた。主な教科は、どうもうすち童蒙須知・はくろくどうけいし白鹿洞揭示・小学内篇・四書（大学・中庸・論語・孟子）・易・詩経・左氏伝・十八史略・とりつ杜律等の句読や、解釈を適当に行っている。

十九世紀初期の思想は、ほとんどロマンティシズムによって支配されていた。つまり純理一点張りに対し、感情を高調し、個性を重んじ、人間の心にかく自然の感情をたつとび今までのしきたりを打破し精神の自由を求めたのである。寧浦もまた従来の格式や方法にこだわらず、当時行われていた山崎闇斎流のきびしい道学主義とは打って変わり、彼の学問は儒を根底とし、佐藤一斉の影響をうけ、朱子学に陽明学をも加え、歴史に通じ詩文を重んじ、易学の大家でもあった。

その指導法は、自由主義をとり、能力に応ずる個人指導を行い、門人の成績控にも、解して妙、意あつて言葉足らず、域は適解、その他丹念に個人別に成績を批評し、また出席日数も記し、誠によく手の行きとどいた指導であった。しかも講義は平易で、門人小牧雪江（安芸市土居）は「先生はいろいろの異なった説を述べ、これを比較して門人によく考えさせて講義をするので実に面白く、よく了解できる。」と評している。

また師弟の間は実になごやかで、講義が終わると、酒好きの彼は高弟数名を残し酒をすすめ、和気あいあいとして常に春風が漂うようであったという。格式のやかましい当時にあつて一風変わった自由主義による新土佐学風をうちたてたのである。また藩庁に対し道徳教育の刷新や自由主義教育の樹立等に関する意見書を提出している。

弘化三年（1820）三月十一日、藩は寧浦の積年の講学の功により切米五石を加増した。し

かし自由人寧浦は藩に仕え、その暇に家塾で門人を指導するのも繁に堪えず、まったく自由な立場で教授したいとの理由で辞職願を出し、藩庁も彼の意のあるところを容れ遂に役目御免となった。

その後寧浦は新町の紅友社で専心学問の研究と教学に精進し、その風をしたって入門するものであふれ、その門下からは間崎滄浪、森田梅礪、奥宮慥齋、岩崎弥太郎、清岡道之助、岩崎秋溟、松岡毅軒、森沢澹、河田小龍らがあり、土佐学界に盛観を呈したのである。前述したように岩崎弥太郎の母美和は寧浦の妻の妹にあたる関係で、特に訓育に留意した。寧浦が塾生に行燈の掃除を命ずると、みな朝から掃除をするが、弥太郎は晩に至り油皿を火中に投じ、油を焼き手を汚さず掃除したので、みなその妙策に感心したと伝えられている。

嘉永元年（1828）藩主豊熙が病歿したので、その知遇に感じていた寧浦は悲嘆にくれ、藩主の墓前に五十日間、雨の日も風の日も一日も怠らず参拝したという。もともと健康のすぐれなかった彼の晩年は、失望と衰弱がもとになり、嘉永六年（1853）十月四日、六十才をもって生涯の幕を閉じ、高知城北の泰泉寺村真宗寺山に葬られた。寧浦は始め親戚にあたる岩崎弥太郎を養子に迎えようとしたが、彼は長男であるので許されず、甥、甥馬がそのあとを継いだ。

寧浦は当代一流の大学者で、時々郷里にも帰り、土地の育英にも影響していたことは見がせない。大正十三年（1939）贈正五位に叙せられた。

墓碑銘は、有名な安積良斉の撰文である。

岡本寧浦先生墓碑名

(訳宮田定繁)

寛永六年十月四日土州寧浦君卒す年六十なり高智城の北真宗寺山にへんす。是より先学者山崎氏の説を奉じて其の弊流固陋なり。

二十年来博く経史に涉り文章を作る。才藻蔚然として傑出する者相望む蓋し以て君之が倡為なり。不幸にして溘逝し一藩咸痛惜せり。

弟子哭すること哀を極む。皆謂ふ先生文學に功有ること偉なり。苟も石を建て詞を鐫銘せずば以て来昆を昭眇する無からん。而して先生を知ること久しく且つ深き者宜しく安積子に如く莫るべしと是に於て予に請いて之を銘せしむ。

君諱は維密字は退蔵岡本氏。家は世々親鸞派の僧となり安芸郡寧田浦乗光寺に住す。因りて自ら寧浦と号す。考諱は辨翁。妣は齊藤氏。幼にして警敏。句読を受くるに過日忘れず。父老い姪立然を養ひて法嗣となし、次を以て君に傳へんと欲す。後立然子有り泰澄と曰ふ。固く譲りて継がず諸州に遊びて京に入り西六條の僧寮に寓す。竺墳を鑽研すること数年緇衲其の精詣に服し推して叢林後進の巨擘となり。既にして其の教の世に裨なきを悟り遂に蓄髮して儒と為り浪華に教授す聲名焯著なり、少将公聞きて之を嘉みす。天保九年召還して俸を賜ひ國痒の教官下僚と為す。後江戸に祇役して留ること數歳乃ち歸る是時養徳公始め政に莅む儒術を崇めて吏務を飾む、鳳教不いに興る。君歎喜して以て人材を育せんと欲し自ら誘掖を効し力を竭す業を受くる者踵相繼ぐ。君遊道極めて廣く交る所の者皆海内知名の士なり相興に経を談じ文を論ず。聞見博くして識力高し。故にその子弟を鼓舞勸奨する所以の者は固陋の弊を矯めて之を誘ふに博大も以てす。操觸の土彬彬如たり。弘化三年祿若干石を賞賜せらる。君簿書叢劇にして教督に遑あらざるを以て乃ち上書して職を辞せんと請ふ、允を得て下僚を解かる。是に於て専ら學を講じ人材を育するを以て己が任となし無何。公薨じて君末疾に遭ひ遂に起たず眞に惜しむ可し。配小野氏子無く姪泰澄の子曉馬を以て嗣となす。君経学に邃く其志伊洛に遡り以て鄧魯の源を究めんとするに在り而して金谿姚江の説も亦辨析精微以て歸一の理を求めんとす。暇あれば則ち一室に端坐し之を仰げは屹然として峻峰喬松の如く就いて之に接すれば色愉しく言温かなり。人をして春風和氣の中に坐せしむ。其の文は胸臆を直據し繩墨に縛せられずして法度自ら具はり、綽として風骨あり壯年儒に歸し人請ひて異教を排して餘力を

遺さずと。而れども未だ嘗て一語も之に及ばず蓋し其の祖考の敬する所を以てなり。其の敦篤率ね此の如し。余縷擧に違あらず如く其の要をつみて以て之を掲ぐ銘に曰く

卓なり。闇齋聖學を神京に倡ふ。懿なる哉維君南海の文章を開く。彼に出で此に入れば徽を疊み光を紹ぐ嗚呼是寧浦先生之塋

安政四年夏五月

幕府儒員 安積信述

参考文献

『安田文化史』

安岡大六著

昭和二十七年二月十一日高知県安田町役場発行